

いわ さき は じん

追悼・岩崎巴人 最期の旅

「奥の細道」北陸路紀行 出雲崎～大垣

会期 10月22日(土)～11月27日(日)

会場 滑川市立博物館 3階 企画展示室1

〒936-0835 滑川市開676 TEL076-474-9200

観覧料—無料

講演会：10月22日(土)・11月6日(日)

いずれも午後2時より、博物館2階ガイダンスルーム

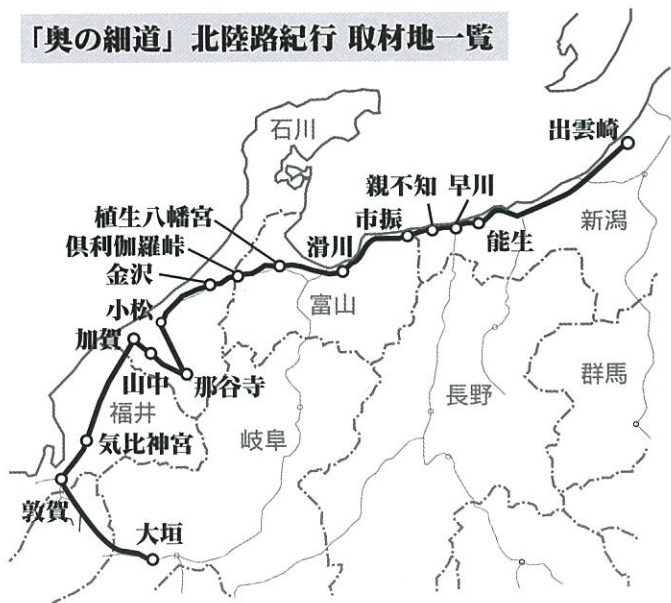
開館時間：午前10時～午後6時 (入室は午後5時30分まで)

休館日：月曜日及び祝日の翌日

主催：滑川市教育委員会・滑川市立博物館

後援：北日本新聞社・Net3

「奥の細道」北陸路紀行 取材地一覧



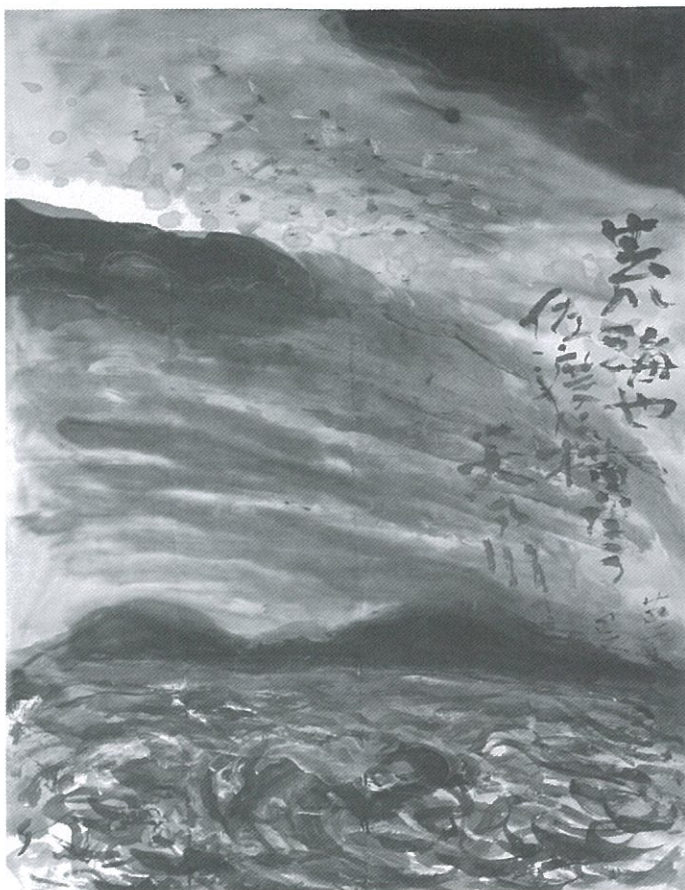
岩崎巴人さんの生き方

岩崎巴人（大6～平22）さんは戦後の日本画壇において、東洋思想を根幹に据えた異色の画僧として知られ、その個性豊かな作品は国立近代美術館や富山県水墨美術館など数多くの美術館に收藏されています。

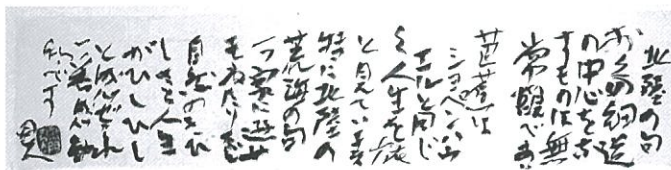
早熟の岩崎さんは13歳で全国公募展に出品し、長谷川利行や佐伯祐三など夭折の画家たちに出会います。翌年、14歳で川端画学校夜間部に入学し日本画家の岡村葵園に出会い、絵画制作の傍ら禅や東洋思想を学んでいます。そして、20歳の頃には萩原朔太郎、高見順らの虚無観を秘めた詩人たちと知り合い詩作を始めますが、この時期に東洋思想と生来の虚無的な詩人氣質とが混在した、岩崎さん独自の人生観が醸成されます。そして、昭和13年小林古径の門に入り第25回院展に初入選し横山大観に激賞され、昭和22年に院友に推挙されます。しかし、戦後の荒廃した現実とあまりにもかけ離れた院展の作風に失望し、間もなく脱会。その後岩崎さんは人生の方向を見失い各地を彷徨し、朝日町にたどり着き川端画学校で知り合った谷口山郷の家に逗留します。昭和33年に谷口らと日本表現派を結成しますが、昭和43年に内部分裂して脱会。以後、会派に属さず個展を中心に活動します。しかし、自ら結成した表現派から脱会させられたという挫折感は深く、60歳の時京都禅林寺において妻と共に出家得度します。これを機に題材の多くは水墨による仏教の故事伝来や河童や花鳥などに変化します。

こんな岩崎さんに「画業の集大成として、芭蕉の『奥の細道』を題材として作品を描いてみませんか」と持ちかけたのは平成19年8月、JR滑川駅前の小さな居酒屋においてでした。以前から、人生の辛酸を経験した岩崎さんの独自の視点から、芭蕉を描いてもらえば面白いと思っていただけからです。芭蕉を俳聖としてではなく、世俗の煩惱と迷いを抱えた一人の男として描いてもらえればと考えたのです。

岩崎さんが92歳で亡くなってもう6年余りの歳月がたちますが、戦後の西欧文化の偏重が日本画を見栄えのよい技巧と過剰なまでに色彩化させ、門閥化させた画壇に対し、墨（水墨画）による精神性の復活を叫び、既成の画壇に挑戦し続けた岩崎さんの孤高の生き方は、今後も高く評価されるに違いありません。本展では市内の個人が所蔵する初公開作品約40点を展覧します。



「荒海や 佐渡に横たふ 天の川」



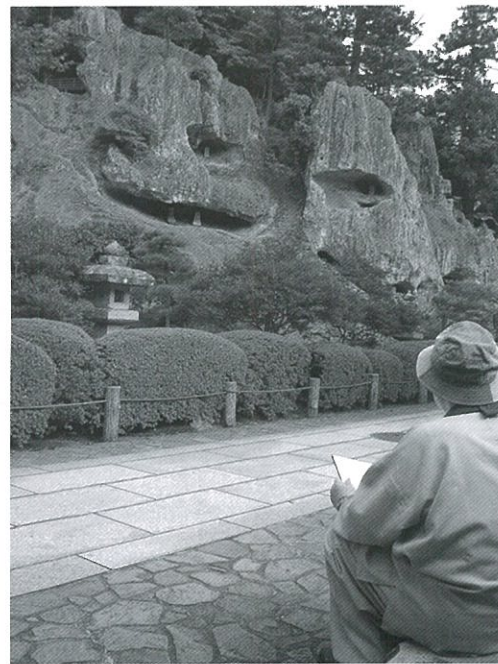
「北陸の句」



画会風景（滑川）



気比神宮（福井）



那谷寺（石川）